

# NAGASAKI YOUTH DELEGATION

## 13th ナガサキ・ユース代表团 2025活動レポート

伝える記憶、終わらない祈り

-被爆80年、共に考える平和のかたち-

Enduring memories, Unending Prayers

- 80years After the War - Contemplating the Forms of Peace Together -



Nagasaki Youth  
DELEGATION

# 戦後80年を迎える今もなお、 なぜ核兵器はなくならないのか？

それは、核保有が必要だと考える人々がいて、世界の歩調が合っていないからだと考えます。核兵器は国家の「抑止力」として依存されており、多くの国で安全保障と強く結びつけられています。つまり、核には核を、という考え方が核廃絶を阻んでいるのだと思います。私たちは、各国の大使や専門家、学生との意見交流を通して、「対話」と信頼による平和を目指す姿勢よりも、「恐怖」により均衡を保つことに信頼を置いている国が多いように感じました。そして、そう考えざるを得ない現在の世界の構造が問題だと思うようになりました。核廃絶は理想とされていますが、核兵器を保有したままで自分たちだけが平和な状態を維持できると考える方がむしろ非現実的なのではないかと思います。核兵器の保有は使用リスクを伴うからです。さらに、核兵器に対する考え方には100か国以上の色があり、一つとして同じ考えを持っている国はありません。そのそれぞれの色を理解していくには、相手の立場を知り、時間をかけてお互いの考えを尊重しあいながら、対話を続けていく姿勢が必要なのではないでしょうか。



10月	募集
11月上旬	第1次審査(書類選考)
11月中旬	第2次審査(面接)
11月下旬	任命式・記者会見
12月～4月	勉強会や研修(NPT運用検討会議第3回準備委員会参加準備を含む) ミーティング等の活動
4月下旬～5月上旬	NPT運用検討会議第3回準備委員会(ニューヨーク) 現地からのインスタ・ブログ発信
5月～8月末	出前講座等によるユースとしての経験・学びの共有活動 活動報告会の開催、活動報告書の作成
8月9日	長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典出席
8月末	ナガサキ・ユース代表団第13期生 任期終了
その他の活動等	核兵器廃絶市民講座への参加 核兵器廃絶長崎連絡協議会等(RECNA、長崎県、長崎市)が開催する イベント等への参加

ナガサキ・ユース代表団  
第13期生の一年間の軌跡

# 4Q&As ABOUT US

ナガサキ・ユース代表団  
に関する4つの基本

## Q1 ナガサキ・ユース 代表団って何？

A. 「核兵器廃絶長崎連絡協議会」(PCU-NC) (右ページ囲み参照) が主催する人材育成プログラムです。2013年に第1期の活動が始まりました。次世代を担う長崎の若者が、核兵器や平和の問題を実践的に学び、この分野で活動する国内外の人々と出会うことで、自ら考え、行動する力を身に付けることを目指しています。被爆から79年が過ぎ、被爆者無き時代の到来を見据えての被爆地からの核兵器廃絶のための発信に貢献する若者が育つことを願ってのプログラムです。

## Q2 誰がメンバーを選ぶの？

A. 選考は2段階で行われます。1次審査は志望動機などが書面審査されます。2次審査は日・英による面接です。長崎大学及びRECNAの教員だけでなく、他大学の教員・長崎県、長崎市の担当者の参加も得て審査を行います。

## Q3 核問題を専門的に勉強していなくても大丈夫？

A. 大丈夫です。選考後の学習を通じて、核問題の基礎から最新情勢までを幅広く学ぶ機会があります。長崎大学核兵器廃絶研究センター (RECNA) の教員に加え元外交官や国連の軍縮担当者など学外の専門家を招いた講義やワークショップも開かれます。また、長崎の被爆の実相やその背景についても学習します。

## Q4 任期後の予定は？

A. 8月末の任期満了を迎えた後は、「ナガサキ・ユース代表団」のメンバーとして活動する義務はありません。しかし、一人一人が自分の経験を活かし、何らかの形で平和の問題に関わっていくことが期待されます。実際に、ナガサキ・ユース代表団のメンバーだった学生には、全国での平和教育の出前講義や講演、取材、また国際交流イベントへの参加などの依頼が多数舞い込みます。義務ではありませんが、核兵器廃絶長崎連絡協議会からそれらの依頼への協力を依頼されることは珍しくありません、また、核兵器廃絶長崎連絡協議会やRECNAが主催する核問題のセミナーやシンポジウム等、様々なイベントに参加することで、さらに知識や経験を積んでいくことも可能です。ナガサキ・ユース代表団での経験を踏まえて、大学院で核問題を専門に学ぶ道を選んだ人もいます。

### 核兵器廃絶長崎連絡協議会 (PCU-NC)って何？

「長崎が核攻撃を受けた人類最後の都市に」と願う長崎県民、市民のため、長崎県、長崎市、長崎大学の三者が一体となって、核兵器廃絶に取り組むための枠組みを構築することが検討され、2012年10月4日に核兵器廃絶長崎連絡協議会 (PCU-NC) を設立いたしました。また、一般会員の長崎県、長崎市、長崎大学に加え、長崎平和推進協会及び国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館も特別会員として参画しております。

# 長崎・広島での学び

## 長崎・広島研修



濱田尚平



Shohei Hamada

私たちは、2月21日と3月12日の2日間にわたり、長崎研修を行いました。2月21日には、平和案内の方々のガイドのもと、爆心地周辺の被爆遺構を訪れ、80年前に長崎に投下された原子爆弾による被害の実相について学びました。遺構を目の当たりにすることで、その被害のすさまじさを肌で感じ、長崎で起こった悲劇がいかに凄惨であったかを深く理解することができました。

3月12日には、長崎で最高齢の被爆者である築城昭平さんの被爆体験講話をお聞きしました。築城さんは18歳のときに被爆されており、その鮮明な記憶に基づく体験談は、にわかには信じがたいほど壮絶なものでした。私たちは、このような苦しみを味わった方々が数多くいらっしゃるという事実を決して忘れることなく、次世代へ継承していく使命があるのだと、改めて強く感じました。

また、3月7日から9日にかけては広島研修を行いました。広島市では原爆ドームが最も印象に残り、原爆による被害の実相を一目で理解することができました。さらに、広島で被爆された佐久間邦彦さんの講話を聞くことができ、長崎で活動する私たちにとって、広島の視点を学ぶ貴重な機会となりました。また呉市では、原爆だけでなく戦争の歴史についても学ぶことができ、改めて平和の尊さを実感しました。

長崎・広島研修は、核兵器廃絶を目指す私たちにとって、活動の原点を知る大切な経験となりました。

## 様々な視点から 核兵器問題に向き合って



富永桜子



Sakurako Tominaga

私たちは核兵器の現状や過去を学び、そして未来について考えるために、自主的に勉強会を企画しました。8名の専門家の方々のご協力のもと、12月から3月にかけて軍縮・教育・原子力政策・国際人道法・被爆の継承などについての講義を受講しました。核兵器に関する勉強は、13期生の多くがゼロからのスタートでした。そんな中、国際連合のしくみから始まり、NPT体制を中心に核をめぐる国際的なシステムについての知識を一日一日積み重ねていきました。核兵器に関する問題は、多面的で非常に複雑であるため、それぞれのご専門が異なる分野の講義を受けることができたのは大変貴重な機会でした。全員が夢になってメモを取って、質問を重ねており、その後のニューヨーク渡航に向けてさらに意欲が高まりました。また、2月にはアメリカのアトランタの学生との意見交換会を実施しました。13期生の発表を聞いたアメリカの学生の「もっと被爆者について学びたい」という声から、オンライン上ではありながらも、熱い議論が展開されました。この初めての国際交流は、自分の意見をどう伝えるかを考えるきっかけともなりました。これらの学びや経験を通して、私たちは「核兵器のない世界」を実現するには、まず自分たちが知り、考え、伝える力を身につけることが重要だと実感しました。多くの専門家の方々や海外の若者との出会いが、私たちの視野を広げ、行動への一歩を後押ししてくれました。私たちの勉強会にご協力いただいたすべての方々に心より感謝申し上げます。

# ニューヨークでの学び

## NPT 再検討会議 準備委員会への参加

私たちは本年4月28日から5月2日にかけて、NY国連本部にて2026年NPT再検討会議第3回準備委員会に参加しました。NPTとは「核軍縮」、「核不拡散」、「原子力の平和利用」の三本柱を目的とした核不拡散条約です。5年毎に条約の再検討会議を行い、議論の結果を最終文書にまとめ、締約国の合意を得て採択を目指します。今回は来年のNPT再検討会議に向けた3回目の準備委員会であり、どれだけ合意への道筋を立てられるかが焦点となっていました。



## 準備委員会の傍聴

初日は各国の一般討論演説を傍聴しました。最初に、日本の岩屋外務大臣が「対話」を軸に締約国で一致団結することの重要性を呼びかけました。唯一の戦争被爆国として被爆者の証言を次世代へ継承する責任についても言及され、長崎の学生として身が引き締まる思いでした。

3日目にはNGOセッションが行われ、日本被団協や広島と長崎の両市長が核兵器なき世界の実現を訴えました。長年の思いが込められた、会場に響き力強い言葉が印象的でした。

4日目からは、三本柱それぞれの具体的な取り組みに関して討論が進められました。

準備委員会における濃密な議論を実際に傍聴して、国際情勢が凝縮された国連の場ならではの緊張感や議論の展開を肌で感じることができました。この経験は、私たちの活動への意識を高め、この先核兵器に関する課題に対してどう向き合うべきか問い直す、重要な契機になったと感じています。

## 世界の若者と紡いだ 平和への対話



私たちは平和首長会議が主催した「Youth Forum」というサイドイベントにも参加いたしました。

ナガサキ・ユース代表団からは川越さんと私が登壇し、13期生の活動を紹介しました。加えて、「戦後80年を迎える今もなお、なぜ核兵器はなくなるのか」という問いに対する私たちの考えを示しました。核抑止の構造的な問題や、日々の無関心という現実に対して、若者の視点から具体的なアプローチを模索し、平和に向かって歩む意志を発信しました。

私たちの他に、広島の高校生や核軍縮分野で活動する海外のユースなど計11組が参加していました。発表後の議論では、「なぜ今も核兵器が存在するのか」「平和のために私たちに何ができるのか」という問いを軸に、意見交換が行われました。文化や価値観の違いを越えて対話を重ね、共感が生まれるプロセスに、私は平和の可能性を強く感じました。ただ一方的に「伝える」のではなく、相手と「共に考える」ことの大切さを改めて実感した時間でもありました。

多くの若者との交流を通じて、核抑止に頼る時代から対話と信頼に基づく平和な世界へと転換していくために、私たち次世代の声が必要の火種になると確信しました。長崎の経験を出発点に、彼らとともに未来を切り拓く第一歩を踏み出すことができた、かけがえのない機会となりました。



今村陽

Haru Imamura

## サイドイベントを通して



NPT準備委員会の開催期間中、様々なサイドイベントが行われます。準備委員会の3日目。この日は私たちがサイドイベントを主催しました。

ナガサキ・ユース代表団として積み重ねてきた経験や、多くの出会いから得た学び、考え続けてきたことを、初めて形にしたこのイベントは、私たち一人ひとりにとって、忘れられない時間となりました。

イベントのタイトルは「New Strategy for Nuclear Disarmament and the Elimination of Nuclear Weapons」。冒頭にナガサキ・ユース代表団からのプレゼンテーションを行い、その後、核兵器をめぐる問題の中でも「核抑止」「軍事産業」という二つの観点から、それらに代わる新たなアプローチを議論しました。

アメリカやイギリス、韓国など、さまざまな国から16名の若者と専門家を招き、グループに分かれてディスカッションを行いました。各グループにナガサキ・ユース代表団のメンバーが一人ずつ入り、英語でファシリテーターを担当。うまく伝えられない場面もありましたが、互いに支え合い、分からないことはその場で質問し合うなど、どのグループも温かな雰囲気の中で議論が深まっていきました。

日本での予行練習では出ることのなかった新しい視点や意見も多く得ることができ、とても充実した時間となりました。この議論はここで終わりではありません。私たちはこれからも、対話と行動を通じて「核なき世界」を目指し、歩み続けていきたいと思っています。

Karin Kawagoe



川越 佳梨

## 大使との面会



ニューヨークでの5日間、私たちは10名の各国大使やNGO関係者の方々と面会するという、かけがえない経験をさせていただきました。渡航前から、伺いたい内容についてメンバー間で話し合い、その一つひとつの出会いを心待ちにしておりました。今回はその中でも数名の方との面会についてご紹介させていただきます。

NYでの活動2日目にお会いしたドイツ大使(写真1枚目)とスイス大使(写真2枚目)は、私たちの問いに真摯に耳を傾け、丁寧に応えてくださいました。中でも深く心に残っているのは、次のお言葉です。「長崎の若者として聞けるうちに被爆者の話をできるだけ多く聞いておきなさい。聞きたいと思ったときには、もうその方はいないかもしれないから。」その一言は、被爆80年という節目を迎える今、被爆者の高齢化が叫ばれている中で心に深く刻まれました。

また、4日目に面会した梅津国連代表部大使の「外交においては、とにかくリスペクトが大切。」というお言葉には、長年積み重ねられたご経験の重みと、大使の優しいお人柄を感じることができました。

この5日間の対話は、その言葉の数々が、私たちの歩みに確かな光を与えてくれました。核なき未来への希望と責任を胸に、私たちはこれから生きていきます。面会してくださったすべての皆様に、心より感謝申し上げます。

バンダーベーン 新愛

Nina VanderVeen



## サイドイベント当日へ 向けた準備



香月  
洗里

Hikari  
Katsuki



私たちは勉強会で、現在約40か国が採用する核抑止政策について学びました。これは、核兵器の脅威によって戦争を防ぐという考え方ですが、核兵器が存在する限り使用のリスクは否定できません。核兵器廃絶を目指すうえで、核抑止のリスクに向き合い、核に頼らない安全保障のあり方を議論すべきだと考えました。

さらに、核兵器の製造過程で利益を得る国や企業が存在することも学び、軍事産業の側面にも目を向ける必要があると感じました。そこで、安全保障と軍事産業の面から代替案を考えるサイドイベントを企画しました。

イベントでは長崎の学生として被爆の実相と被爆者の想いを伝え、核兵器をめぐる世界の現状を提示して問題提起へつなげることにしました。準備の過程で特に忘れられないのは、核問題を研究されている博士課程の方やユースOGの方にご参加いただいた予行練習です。ファシリテーターとして英語で議論を進める難しさ、知識不足を痛感しました。限られた時間で深い議論を行うための時間配分についてもご指導いただきました。より良いイベントを目指し、メンバーと議論と練習を重ねる中で、核問題への理解が深まるとともに、一人では得難い貴重な経験ができました。

## これからの13期生

NYから帰国後も、私たちの活動は続いています。

帰国直後には、現地での経験や学びを共有するNY報告会を開催しました。当日の様子は現在もYouTubeにてご覧いただけますので、ぜひご視聴ください。

また6月には、13期生がこれまでの活動を通して感じた「対話の大切さ」や、それぞれの想いを核兵器廃絶市民講座にて登壇し、発信しました。

現在は、県内外の小・中・高校を訪れ、世界の核兵器をめぐる現状やNYでの経験を伝える出前講座を行っています。

私たちの活動の任期は8月末までですが、その先も13期生6名は、それぞれの色で平和と関わり続けていく道があると信じ、歩みを進めていきます。

# 13th DELEGATION



## それぞれの色で NY and NAGASAKI

### 13期の活動を振り返って 樋川 和子(RECNA副センター長)

13期生の皆さんは素晴らしいチームワークでニューヨーク渡航までの過酷な準備期間を乗り切ってくれました。あの準備期間があったからこそ、ニューヨーク渡航が非常に有意義なものになったのではないかと思います。ニューヨークではNPT再検討会議準備委員会に参加するために世界中から集まった人々と交流し、議論もし、沢山刺激を受けたのではないのでしょうか。このプログラムを通して得られた成果というものはすぐに目に見える形では出てこないかもしれませんが。ですがきっと、いつか振り返った時に、このプログラムが皆さんの人生に大きな足跡を残していることを願ってやみません。

#### ■ 編集発行責任

核兵器廃絶長崎連絡協議会 (PCU-NC)

※PCU-NCは、長崎県、長崎市、長崎大学の3者による核兵器廃絶のための協議体。

**核兵器廃絶  
長崎連絡協議会**  
PCU-Nagasaki Council

#### ■ お問い合わせ先

核兵器廃絶長崎連絡協議会 (PCU-NC)

〒852-8521 長崎市文教町1-14  
(長崎大学核兵器廃絶研究センター (RECNA) 内)  
TEL:095-819-2252 / FAX 095-819-2165  
<https://www.pcu-nc.jp>

「ナガサキ・ユース代表団」公式Instagram  
[https://www.instagram.com/nagasaki\\_youth\\_delegation/](https://www.instagram.com/nagasaki_youth_delegation/)

Instagram

Nagasaki Youth Delegation

